

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

The Femininity implied in the Image of Maya Civilization and Tourism in Mexico : A Case of Chichen Itza Archaeological Park, Yucatan

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-04-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 杓谷, 茂樹 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00001949

メキシコにおける「マヤ文明」イメージの〈女性性〉と観光 ユカタン州、チチェン・イツァ遺跡公園の事例を中心として

杓谷 茂樹
南山大学

The Femininity implied in the Image of Maya Civilization and Tourism in Mexico A Case of Chichen Itza Archaeological Park, Yucatan

Shigeki Shakuya
Nanzan University

スペイン人による征服直後から、国際的な観光地として多くの観光客を迎え入れるようになった現在に至るまで、マヤ地域は¹⁾スペイン人による征服と植民地化、²⁾欧米世界のアジア・アフリカの植民地化の時代の影響、および³⁾20世紀終盤のグローバリゼーションという3つの植民地的状況を経験してきた。本研究ではこれらの植民地的状況のもと、欧米人がそのまなざしの中でマヤ遺跡に求めてきた〈女性性〉という概念を提示しながら、最近のチチェン・イツァ遺跡の公園整備について分析する。そして考古学による説明と観光開発の間で遺跡の意味づけが左右される中での、このマヤ遺跡公園のあり方について考察する。

The Maya area, from the 16th century up to the modern times, has experienced three types of colonial situation: 1) the spanish conquest and colonization, 2) the influence of european colonization of asian and african countries, 3) the globalization in the last 20th century. This study analyzes actual development of Chichen Itza Archaeological Park in Yucatan, Mexico, suggesting the concept of "femininity" for which the Westerners, under these situations, have longed in their eyes on Maya Civilization. And then it considers the confrontation of new interpretations in Maya archaeology and recent tourism development activities in this area, which determines the significance of the nature of Chichen Itza archaeological site.

- | | |
|--|--|
| <ul style="list-style-type: none"> 1 はじめに 2 スペイン人による征服と植民地化 <ul style="list-style-type: none"> 2.1 ヨーロッパとアメリカ 2.2 ヨーロッパ人のアメリカ観 2.3 アメリカの〈女性性〉 2.4 「マヤ文明」イメージ成立前夜 3 欧米世界のアジア・アフリカの植民地化の時代の影響 <ul style="list-style-type: none"> 3.1 独立後のメキシコとユカタン地方 3.2 「マヤ文明」イメージの成立 3.3 チチェン・プロジェクトとモーレー 3.4 メキシコ中央と〈男性性〉 4 20世紀終盤のグローバリゼーション | <ul style="list-style-type: none"> 4.1 「ムンド・マヤ計画」 4.2 「ムンド・マヤ計画」以前のチチェン・イツァ遺跡公園の変化 4.3 世界遺産チチェン・イツァ遺跡公園の変貌 5 現在のチチェン・イツァ遺跡における考古学と観光のせめぎあい <ul style="list-style-type: none"> 5.1 新たな「マヤ文明」イメージの出現 5.2 旧チチェンの切り捨て 5.3 「ムンド・マヤ」のチチェン・イツァ遺跡公園 6 まとめ |
|--|--|

*key words: the image of Maya civilization, colonial situation, femininity, enclosure of archaeological site, Mundo Maya

*キーワード：「マヤ文明」イメージ、植民地的状況、女性性、遺跡の「囲い込み」、ムンド・マヤ

1 はじめに

我々は「遺跡」という言葉を英語にしようとしたとき、しばしば“ruin”という単語を用いる。しかし、“ruin”を辞書で引いてみると、第一義として「廃墟」という意味がそこに書かれていることに気付くであろう。この“ruin”というひとつの単語で包括される「廃墟」と「遺跡」という二つの日本語の持つ意味の違いは、本研究においては重要な意味を持っている。人間の生活の場は、その人間がそこで活動することを放棄した時点で「廃墟」となるが、その「廃墟」の中に、後に何らかの形で再発見されて、それに何らかの「意味づけ」がなされるものがある。その時、はじめてこの「廃墟」は「遺跡」になるのである¹⁾。

本研究はこの遺跡の「意味づけ」のあり方と観光との関わりについて考察しようとするものであるが、ここでは対象をメキシコのマヤ遺跡²⁾、それもチチェン・イツァというユカタン半島北部にある遺跡に絞ることにしたい(図1)。

メキシコには16世紀にスペイン人がこの地を征服する以前に、各地で人々が繰り広げてきた生活の跡、すなわち遺跡が無数に存在している。それらは、世界的に知名度の高いアステカやテオティワカン、マヤの他、オルメカ、サボテカ、トルテカ、トトナカといった「古代文明」の痕跡であり、これらはメソアメリカ文化圏としての共通性を持ちながらも、地域ごとに明確な文化的特徴によって分類されてきた。そして、これらの文明の残した「廃墟」を「遺跡」に変える「意味づけ」のあり方も、それぞれの地域によって様々な様相を見せているといえる。

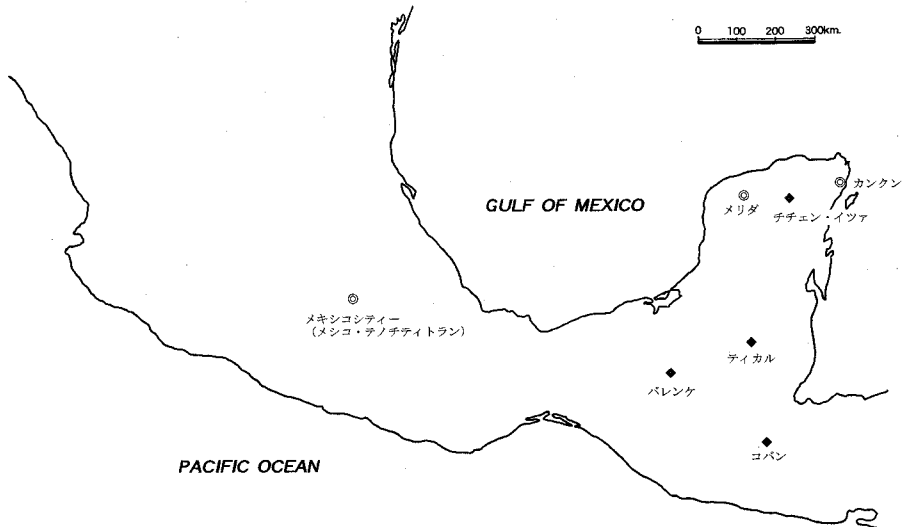


図1 本稿に関する主要な都市と遺跡

こういった中で、メソアメリカの他の地域と比較したとき、後に述べるように、マヤ地域の遺跡の場合、これを意味づけようとするまなざしが主に欧米の側から向けられてきたことが特徴的である。それは、メキシコのマヤ地域の大半を占めるユカタン半島が、メキシコのなかでは最も欧米に距離が近く、国内的には地理的のみならず心情的にも中央から最も遠い場所にあるという位置づけが大きく関係していると考えられる。この点、グアテマラやホンジュラスなど他のマヤ遺跡の場合とは若干事情が異なってくるが、これについての議論は別の機会に譲ることとしたい。

この欧米の側から向けられたまなざしとは、植民者としての欧米と被植民者としてのマヤという対立関係の上に成立する西欧論理の押しつけに他ならないが、このまなざしをふまえて歴史的な観点から遺跡のあり方について考えることの意義は大きい。16世紀以来様々な形で注がれてきたこのまなざしの堆積が、まさに現在の「マヤ文明」イメージを形づくっている正体であると考えられることができるからである。

そこで、本研究では、まず先スペイン期のマヤの人々の生活の跡が「廃墟」となった征服直後から、「遺跡」として多くの観光客を迎え入れるようになった現在に至るまで、この地域が経験してきた3つの植民地的状況について考えることにする。すなわち、それは1) スペイン人による征服と植民地化、2) 欧米世界のアジア・アフリカの植民地化の時代の影響、および3) 20世紀終盤のグローバリゼーションという3つのタイプの異なる欧米からの働きかけである。そして、現在遺跡公園としてのチチェン・イツァが置かれている特殊な状況をふまえて、これらの植民地的状況のもと欧米人がそのまなざしの中でマヤ遺跡に求めてきた〈女性性〉と関連づけながら、現在「マヤ文明」イメージの形

成において重要な位置を占めているマヤ遺跡の意味づけのあり方と観光との関わりについて考えてゆきたい。

2 ス페인人による征服と植民地化

2.1 ヨーロッパとアメリカ

「1492年にコロンブスがアメリカを〈発見〉した」という言説は、ヨーロッパ中心主義的な表現であるが故に、特にアメリカ大陸の側から多くの批判が提出されている。この議論の中心に置かれていたのは〈発見〉したのか〈出会った〉のかということであった³⁾。だが、この出来事が「アメリカの発見」に関して象徴的な意味を持つことは間違いないものの、一方で実際にこの年の第1回航海でコロンブスが到達したのは、カリブ海に浮かぶ西インド諸島のサン・サルバドル島をはじめとするいくつかの島々にすぎず、この「アメリカ発見」の言説をめぐる議論においては、広大な南北アメリカ大陸におけるいろいろなレベルの多様性が全く考慮されていないという点は指摘されなければならないだろう。

このアメリカにもともと住んでいた人々を征服者であるスペイン人たちは「インディオ」と呼んだ。この「インディオ」という呼称もアメリカ先住民のもつ文化の多様性を意図的に無視して、十把一絡げにして彼らと呼んだものである。すなわち、当時のヨーロッパ人にとっては、それがアステカであろうが、マヤであろうが、インカであろうが、被征服民は敗者であり、それはすなわちインディオだったのである（清水他 1992: 7）。そこには新大陸に多様に存在していた個別の文化のイメージは存在せず、あるのは「アメリカ」のイメージのみであった。このように、征服当時のヨーロッパ人は、「ヨーロッパ：アメリカ」という二項対立的な見方を通してこの新大陸を見ていたのである。

2.2 ヨーロッパ人のアメリカ観

ところで、大航海時代には、ヨーロッパ人は人間をキリスト教徒と異教徒の二つに分けて考えていたということは、しばしば語られることである。そのような当時のキリスト教中心主義的な考え方では、世界の中心であるキリスト教徒のヨーロッパは「文明」、周辺の異教徒は「野蛮」という明確な区分がなされたことは言うまでもない（cf. 増田 1965: 22-23）。そして、キリスト教的規範に反した「野蛮」な生活をおくるアメリカ人に関して述べる時、悪魔崇拜、食人、人身御供といった非人道的なイメージがしばしば強調され、時には無頭人、巨人、そして非人間的な怪物などとして描かれることもあったこともよく知られている（Duviols 1985: 33-86）。すなわち、この両者の対立関係の内には「ヨーロッパ：アメリカ＝キリスト教徒：異教徒＝文明：野蛮」という図式が厳然と存在し、ヨーロッパ人のアメリカ観の根底を支えていたのである。

しかし、この「アメリカ=野蛮」イメージが、自らのアメリカ征服とその植民地化を正当化するためにスペイン人によってことさらに強調され利用されてきた一方で、全く異なったアメリカ観も存在していたのも事実である。1580年に書かれた『エセイ』第一巻で、モンテーニュは次のようにアメリカ先住民の純粹さを讚美している。それはヨーロッパが文明化する以前の原初的な世界の人々のイメージでもあった。

「それら新大陸の住民たちは、人間の精神の手をほんの少ししか加えられておらず、彼らの生来の純朴さに非常に近いために、野蛮だと思われるのだ。自然の法則が、人間の法律による変質をほとんど受けないうままに、まだ彼らを支配している。(中略) 経験を通してわれわれがこれらの民族のなかに見てとったものは、詩歌が黄金時代を飾るのに用いたあらゆる描写や、人間の幸福な状態を思い描くのに用いたあらゆる思いつきを越えているだけでなく、哲学の考えていること、願っていることをさえもしのいでいる」(モンテーニュ 1967: 170)。

エリック・リードの指摘によるならば、異境の地で思いもかけず異教徒であるその住人と出会ったとき、ヨーロッパ人はキリスト教化以前の「黄金時代」、あるいは「楽園」のイメージを彼らに付与したのである (リード 1993: 210-212)。ヨーロッパ人は、ギリシャ、ローマに起源を持つヨーロッパ文明という確固とした枠組みがあって、これにパレスチナに起源を持つキリスト教という大きな理念が分かちがたく結びついて形成されたひとつの世界観の中で当時暮らしていた。ここでこのパレスチナがその当時すでに異文化圏、すなわち外部世界に属していたことは重要である。キリスト教徒が外の世界に想像力を働かせたこのような局面では、旧約聖書に描かれているイエス・キリスト出現のはるか昔に、その外部世界であるところのパレスチナの地にあったという「楽園」のイメージが、その想像力の中に投影されることになったことは容易に理解できよう。コロンブスの航海日誌を見てみると、そこには従順で、おとなしく平和に暮らす先住民の姿や、鳥々の豊かな自然の様子が多く描かれている (コロン 1977)。新世界に関する様々な情報が飛び込んでくる中で、こういった情報もヨーロッパ本国に伝えられたが、そこからこの新世界の様子を想像しようとしたとき、ヨーロッパの人々は上記のごとくキリスト教的歴史観、世界観の枠の中に位置づけられる「楽園」のイメージをこれに照らし合わせたのである。また同時にそれは魔女狩りに象徴されるような社会不安の中で日常生活に汲々とし、戦争に明け暮れる文明化した本国と対照をなすイメージとして、ヨーロッパ人がアメリカに希求したものでもあったということも考えなければなるまい。この「ヨーロッパ：アメリカ=墮落：楽園=戦争：平和」という図式は、植民地期には、前述した「アメリカ=野蛮」イメージと平行して、当時のヨーロッパ人のアメリカ観の中に存在していたのであった。

2.3 アメリカの〈女性性〉

スペインが新大陸を征服してゆく過程で、多くの人間が大西洋を渡っている。当然のことながら、征服期から植民地期の初めにかけて、新大陸に渡ったもののほとんどは男性であった。よって植民地期の初期には極めて深刻な男性過多の状態が続いていたことは想像に難くない。その中でヨーロッパ人女性不足を補ったのがアメリカの女性であったり。そして、そのような状況を代表するかのよう、メキシコの征服者であるスペイン人エルナン・コルテスと、女奴隷として彼に差し出され、その愛人兼通訳となってこれを助けた先住民女性マリンチェという有名な一組の男女は、ヨーロッパとアメリカの関係を象徴的に表すものとして、これまでも様々なコンテキストで語られてきた。

ここに見られる「ヨーロッパから男性がやってきて、未開人であるアメリカの女性がこれを迎える」という図式は、エリック・リードが旅の文化的形態としてあげた「男性の機動性」に対する「女性の定住性」という図式とも相通ずるものであるが（リード 1993: 279）、ヨーロッパ人のもつアメリカ観の中にこの図式を見出すことのできるよい例としてしばしば紹介されるのが、1589年にヤン・ファン・デル・ストラエト（ヨハネス・ストラダヌス）によって描かれた『アメリカ』と題する版画（図2）である（Duviols 1985: 74; ヒューム 1995: xvi-xvii 1-2; 落合 1993: 17-20; 1996: 55; 荒木 1999: 14-22, etc.）。アメリゴ・ヴェスプッチが新大陸「アメリカ」に上陸した場面を描いたこの絵は、落合一泰によれば「ヨーロッパによる新大陸の発見を、ヴェスプッチによる眠れるアメリカの覚醒として象徴的に表現したアレゴリー」で、そこではヨーロッパとアメリカの出会いという主題が「ヨーロッパ：アメリカ＝男性：女性」という明確な対比の他に、両者を象徴する様々な二項対立によって構成されている⁵⁾（落合 1993: 19）。またここで着衣



図2 『アメリカ』（ヤン・ファン・デル・ストラエト画、1589年）[Duviols 1985: 79]

のヴェスプッチに対し裸婦として描かれているアメリカの姿には、まさにアメリカが「発見（ディスカバー）」されたという含意が込められているといえよう。

落合はまた、そうしたアメリカのアレゴリーとしての女性像が再生産されてゆく背景に、有名なアマゾネス伝説をはじめとする、新大陸に存在したという女戦士の国のうわさがあったことを指摘している (ibid.: 15)。戦うのは男性というヨーロッパ人の価値観からはずれたアマゾネスという存在への想像力には、当然ヨーロッパ人の「アメリカ＝野蛮」イメージが反映されていたものと思われる。しかし、そこにはヨーロッパ人が平行して持っていた「アメリカ＝平和」イメージの一端もかいま見ることができるのではなかろうか。アメリカに対し優位を感じていたヨーロッパ人が征服当時を持ったこの楽園の女戦士への想像力を考えたとき、筆者にはそれが、例えば現代の女子野球や女相撲のようにもともと男性が独占していると考えられていた分野に女性が進出し始めた時、その初期の段階で我々（特に男性の側から）が一種の「ほほえましさ」を感じながらこれらに対して向けてしまいがちになる奇異のまなざしと似ているように思えてならない。

ところで、この「ヨーロッパ：アメリカ＝男性：女性」という象徴的な対比は、両者の権力関係を措定するところから導き出されるものであって、それ以上の社会的意味を持つものではないが、このような「性別化（ジェンダリング）」という行為については、地域間文化関係論、植民地言説研究、あるいは本研究に関係するものとしては、旅をめぐる思想研究などにおける他者認識に関する議論などにおいて、しばしば取り上げられてきた（リード 1993: 279-296; 落合 1996: 54-56; Loomba 1998: 151-172, etc.）。上で見たようなヨーロッパ中心主義におけるアメリカ観においては、〈見る側〉として常に主体となる優位のヨーロッパと、〈見られる側〉に置かれた劣位のアメリカとの対立は、必然的にヨーロッパを男性に、アメリカを女性に喩えるという文化間性差論に結びついたのであった。

他者との関係において自己のアイデンティティーを確認し、これを外に向かって主張しようとする場合、その主張に自らの〈男性性〉が強く取り上げられることがある。自らを主体として男性の地位におこうとする性別化行為が行われたためである。このようなケースは世界史の中でも枚挙にいとまがないことであるかもしれないが、あえて例をあげるならば、後に述べるように20世紀初頭のメキシコ革命では、国家アイデンティティーの象徴として男性的なアステカ軍事国家文明像が利用されているし（落合 1996: 64）、スコットランドのスターリング地域においては、その地が1297年と1314年の二度イングランドとの戦いに勝利した土地であることによりスコットランド・ナショナリズム（あるいはスコティッシュネス）にとって重要な意味を持っており、その歴史的文化財の観光開発にあたってはあえて〈男性性〉が強調されたという報告もある（Edensor and Kothari 1994）。

本研究では、この〈男性性〉の対概念として〈女性性〉という概念をここに提示する。それは他者として客体の側におかれたものに対し、主体である相手の側による性別化行

為により一方的に付与されるものである。ここでは植民地的状況の中で、ヨーロッパが他者としてのアメリカにまなざしのレンズを向けた際に通過させたフィルターの色、あるいは上で見てきたような「楽園」、「平和」、「定住」、「迎え入れる」といったアメリカのイメージを包み込む空気のようなものといってもよからう。

2.4 「マヤ文明」イメージ成立前夜

この時代、当初はこれまで見てきたように一元的なアメリカ観を持っていたヨーロッパ人も、時間の経過とともに、次第にその多様性に目を向けるようになっていったのは当然の成り行きであろう。

本研究が対象とするマヤ地域においては、植民地時代に多くの「廢墟」を宣教師や軍人、役人などが既に訪れていたものの、残念なことに彼らが残した報告書のほとんどは19世紀後半以降になるまで完全に忘れ去られていたといつてよい。その唯一の例外ともいえるのが、18世紀にデ・ソリス神父が訪問して以降、その名が知られるようになり、好事家、冒険家、学者、あるいは旅行家がひっきりなしに訪れるようになったチアパス州のパレンケ遺跡であった（ボーデ他 1991: 36-58; Matos Moctezuma 2002: 20-21）。

18世紀後半のヨーロッパでは、啓蒙主義思想の広がりの中でルソーの「高貴な野蛮人」に代表されるような自文明批判が展開されていた。そこに19世紀初頭、ナポレオンのエジプト遠征の際に収集された古代エジプト文明の遺産が紹介されるといった出来事があり、それはヨーロッパ人のエキゾチックな「古代文明」というものに対する高い関心を呼ぶことになったのである。ちょうどそんな風潮の中でヨーロッパに伝えられた中米の古代文明に関する情報は、一部の好学家たちの中に、初めて未知の「マヤ文明」に対するさまざまな想像力を刺激していった。そして、19世紀のヨーロッパの学界では古代エジプト人説、カルタゴ＝フェニキア人説、イスラエルの失われた民族説、アレクサンダー軍の一部説、アトランティス文明の残存者説など、「マヤ文明」の担い手の起源に関する議論が雑多に飛び交うことになる⁶⁾ (cf. Wauchope 1962, etc.)。だがこういった諸説がさかんに論じられている中で、この文明のアメリカ起源説が一学説として認められるには、旧世界との関係ばかりに気を取られることなく、キリスト教世界の古典的知識の呪縛から解放される必要があったのである（ボーデ他 1991: 46-47）。結局、現在では誰も疑うことのない、旧世界と接触することなく全く独自に発展してきた「マヤ文明」という考えが、諸説に伍してようやく市民権を得るようになったのは19世紀半ばのことであった。

このようなキリスト以前の文明のイメージというバイアスを通して、「マヤ文明」を観ようとしたまなざしの中には、植民地期初期の一元的アメリカ観にみられたのと同じ〈女性性〉を希求する姿勢が存在していたといえるだろう。そして、この後に先スペイン期の人々の活動の跡を「廢墟」から「遺跡」に変えるための「意味づけ」が本格的に行

われるようになって、やはりこの〈女性性〉は大きな影響力を持つことになるのである。

3 欧米世界のアジア・アフリカの植民地化の時代の影響

3.1 独立後のメキシコとユカタン地方

18世紀後半のアメリカ合衆国の独立に若干遅れて、19世紀初頭にラテンアメリカ諸国は相次いで本国から独立する。本国生まれのスペイン人であるペニンシュールの支配に対する、植民地生まれの白人クリオージョの反乱という性格で始まった独立運動の結果は、独立したばかりのラテンアメリカ国家内部の社会構造に大きな変化をもたらすことなく、各国でナショナリズムが芽生えてきたとしても、ラテンアメリカは相変わらずヨーロッパ中心主義の呪縛から解放されることはなかった。ただ変わったのは弱体化したスペインに代わり、イギリスとフランスが彼らにとってのヨーロッパとなり、これに米国が加わったことである。

19世紀中頃までのメキシコは、ラテンアメリカ諸国のなかでも最も欧米の政治的干渉を受けた国といっても過言ではない。1846-48年の米墨戦争での敗戦、そして1864-67年にはフランスのナポレオン3世によって送り込まれたハプスブルグ家のマクシミリアン大公による帝政といった外交上、政治上の重大事件を経て、メキシコはベニート・フアレス大統領のもと国家体制が復興されて以降、ようやく政治的に独立した本格的な国家の建設に向かって歩き始めるようになった。メキシコ国家はその後のポルフィリオ・ディアス政権のもとで一旦ヨーロッパ中心主義からの脱却とは正反対の道を歩んだものの、政治的に独立した本格的な国家の建設という大仕事は、1910年に始まるメキシコ革命によって最終的に達成されることになった。ただ、その過程で、ユカタン半島は一貫して蚊帳の外におかれていたのである。

マヤ地域の北部を占めるユカタン半島は、陸上交通ルートが未整備であった当時、メキシコ中央から見て陸の孤島ともいえる地理的位置にあった。そして、1847年に始まり50年間あまりにも及んだカスタ戦争というユカテコ・マヤ先住民の反乱はこの地とメキシコ中央との政治的対立という図式を作り出していた。カリブ海に突き出した形のユカタン半島は、陸続きのメキシコ中央よりも、むしろ海の向こうにある欧米に、ある種の距離感の近さを感じていたのであろう。実際、19世紀後半にはユカタン地方は米国とは特産のエネケン輸出を通して直接結びついていたし（初谷 1989: 19-21, 24-25）、また17世紀中頃よりこの半島の南東部分に入植を始めていたイギリスも、この時期メキシコ政府からこの入植地の領土権を奪取し、英領ホンジュラス（現在のベリーズ）という植民地を持つことになるが、彼らはその過程でこの地からカスタ戦争に先住民側に肩入れする形で介入を行っている（初谷 1995: 94-98; 1998: 91-92）。

この当時、イギリスとフランスはアジアやアフリカの広大な地域を植民地化しており、そのような風潮の中では、欧米諸国のラテンアメリカに向けるまなざしは、植民地に対す

る宗主国のそれと何ら変わるものではなかったと思われる。そういった中で、国家統合の網から漏れていたユカタン地方は、第2の植民地的状況に置かれたということができよう。

3.2 「マヤ文明」イメージの成立

イギリスやフランスの植民地支配においては、多くの探検家が各地に送り込まれ、その博物学的興味から様々な物品が収集され、さらに民族学、文化人類学という学問もそのような風潮から生まれてきたことは今さらいうまでもなかるう。そのような19世紀後半はマヤ地域にとっても探検の時代であり、その点では英仏の植民地と何ら変わらない状況であったのである。

そんな中で、「古代マヤ文明」のイメージが欧米で広く知られるようになったのは、アメリカ人ジョン・ロイド・スティーブンスによって出版された『中央アメリカ、チアパス、ユカタンの旅の事物記』(Stephens 1841)と『ユカタンの旅の事物記』(1843)の一連の著作によるものといえる。スティーブンスの冒険心、そしてユーモア溢れる文章は多くの読者を魅了したが、その成功はスティーブンスとともにこの地を旅したイギリス人画家フレデリック・キャザウッドによる精密な銅版画が添えられてこそのものであった。写真が一般的でなかった時代に、この正確に描写された銅版画の挿し絵は、欧米の読者に「マヤ文明」の視覚イメージを強烈に植え付けるのに大いに役立った。そして、その成果に触発される形で、19世紀後半にはフランス人デジレ・シャルネイ、イギリス人アルフレッド・モーズレー、オーストリア人テオベルト・マーラー等が相次いでマヤ地域を探検し、当時発明されて間もない写真技術を駆使して「マヤ文明」の視覚イメージを欧米に紹介している。

この時期の欧米の人々による「マヤ文明」の「再発見」と「意味づけ」は、古代マヤ人が残した「廃墟」を「遺跡」に変えた。この再発見においては、かつてスペイン人征服者がアメリカを「発見」した際と同じプロセスを経たことは容易に想像できよう。すなわち、想像を絶するほど巨大な未知の文明の遺産を目の当たりにしたとき、自分たちの想像力の範囲内で、既知の事例をもとにこれを「意味づける」という作業が行われたのである。チチェン・イツァ遺跡やウシュマル遺跡、パレンケ遺跡など古くから欧米に紹介されていたマヤ遺跡では、現在でもその主要な建造物の名称にこの当時からの呼び名である城、宮殿、尼僧院、教会などがそのまま用いられていることが多いが、これは植民地期の建造物のイメージを古代マヤの建造物に照らし合わせたひとつの西欧的な「意味づけ」であるといえよう。そういった「意味づけ」の中に、植民地期の〈女性性〉を孕んだアメリカ観は引き継がれ、「マヤ=楽園=平和」というイメージはこの頃に確立したのである。また、もう一つのイメージであった「アメリカ=異教徒=野蛮」も変質し、「謎」、「神秘」、あるいは「エキゾティシズム」と名前を変えて受け継がれてゆくことになったと考えられる。

1891年から94年までハーバード大学ピーボディー博物館によって実施されたコパン遺跡の考古学調査によってマヤ地域は探検の時代を終え、考古学による学術的調査の時代に入る。その後この地域でおこなわれた大規模な調査は、そのいずれもがピーボディー博物館や、ペンシルバニア大学、チューレーン大学そしてカーネギー研究所といった米国の研究機関によるものであったとあってよいだろう。このように探検の時代からこの初期の考古学の時代にかけては、常に欧米のまなざしが「マヤ文明」を意味づけてきたといえる。

3.3 チチェン・プロジェクトとモーレー

チチェン・イツァ遺跡では1924年から40年にかけてカーネギー研究所によって大規模な考古学調査がおこなわれたが、この「チチェン・プロジェクト」を率いていたシルヴェイナス・モーレーは、当時のマヤ研究におけるもう一人の雄エリック・トンプソンとともにこの「古代マヤ文明」イメージの「意味づけ」を推進した人物であった。彼らの提示したマヤ文明観は、この文明自体が均質的かつ静態的なもので、戦争のない平和な社会がそこにあり、そこではその神官と農民からなる二階層社会の支配階級である神官が、毎日星ばかり眺めて天文学や暦を発展させ、宗教活動に没頭していたというようなものであったが、そのような彼らの「マヤ文明」に向けるまなざしには、そこに植民地期以来の〈女性性〉を見て取ろうとする姿勢が受け継がれていると考えることができる。モーレーは「チチェン・プロジェクト」開始当初から、主要な建造物の調査というよりも、その修復の方に力を入れているが、その態度には「マヤ文明の謎」を科学的に究明するというより、むしろ彼がイメージしていた「マヤ文明」の栄光を象徴するモニュメントとして建造物を復元するという方向性が明確に現れている (Black 1990: 273)。チチェン・イツァ遺跡の場合、このモーレーのプロジェクトをもって現在我々が目にするのできる主要な建造物のほとんどの修復を完了し、外側からイメージしたチチェン・イツァ遺跡の姿、すなわち観光客がこの遺跡を訪れる際に遺跡に対して持

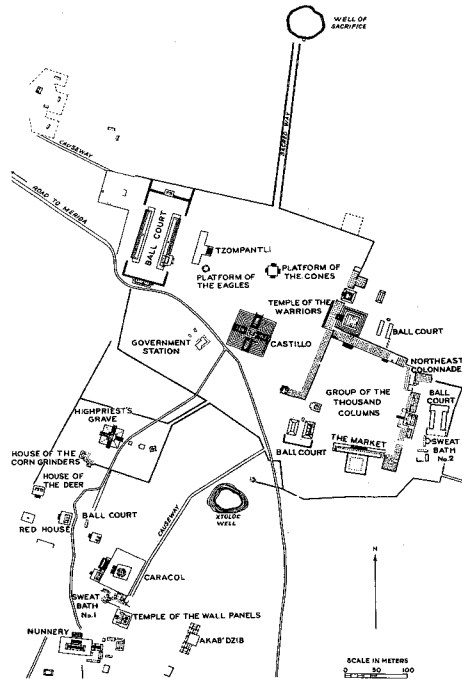


図3 チチェン・プロジェクトの際に作成されたチチェン・イツァ中心エリアの平面図 [Sharer 1994: Fig.7.3]

ってくるイメージが固定化してしまうのであるが（杓谷 2001: 3-6）（図3，写真1，2），個々の建造物がそれぞれ強烈な個性を発散しながら展示されているこの遺跡に表現された「マヤ文明」イメージには、モーレー等がそこに見て取ろうとした〈女性性〉が内包され、これにマヤの「謎の文明」イメージ，すなわち「エキゾティシズム」が色を添え



写真1 エル・カスティージョ
チェチェン・イツァ遺跡のひとつのイメージとして、旅行会社のパンフレットではこの建造物の写真が使用されることが多い。（筆者撮影）

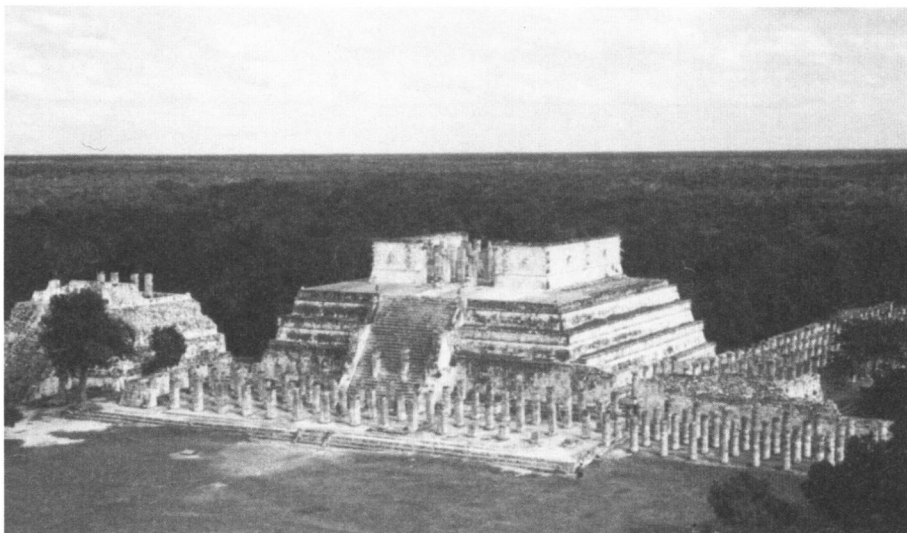


写真2 戦士の神殿
エル・カスティージョの上から撮影したこの建造物の写真も、同様にチェチェン・イツァ遺跡のひとつのイメージとしてよく使用される。（筆者撮影）

ているのである。

3.4 メキシコ中央と〈男性性〉

ところで、上述のごとく第2の植民地的状況にあったユカタン・マヤ地域に対して、同時代のメキシコ中央がこれとは全く対照的なプロセスを歩んできたことは重要である。特に1910年に始まるメキシコ革命は、メキシコの国家アイデンティティーが確立された非常に大きな歴史的イベントであった。19世紀後半に33年間も続いたポルフィリオ・ディアス政権下での自由主義的な政策は、メキシコの国土と資源を欧米資本にゆだね、国内的には貧富の差を拡大させる結果となり、これに対する国民の不満が革命の引き金を引いたのである。

このメキシコ革命には様々な側面があるが、文化的観点に立てば、それまでのヨーロッパ中心主義を排して、メスティソがメキシコ人である自分たちのアイデンティティーを求めて立ち上がった運動であるといえる。メキシコ革命をこのような視点から論じたオクタビオ・パスは、メキシコでメキシコ人自身を指すときにしばしば用いられる「イホ・デ・ラ・チンガーダ(犯された女性の子供)」という言葉を取り上げ、先住民文化をスペイン人にレイプされた女性に例えて、自分がその子孫であることを拒否する態度に「メキシコ的なもの」のあり方を見ている(パス 1982: 74-88)。このスペイン人にレイプされた女性、すなわち「チンガーダ」としてのインディオは、その「外部に開かれた受動性」のために自己のアイデンティティーを失ったが(*ibid.*: 86)、メキシコ人はそうした「チンガーダ」の子供として生まれることで始まった自分たちの過去と訣別し、スペイン人でもインディオでもない「ひとりぼっちの人間」であることを自覚する。そして同時にその孤独と絶望を超越しようとする意志を持ったのである。パスはそんなメキシコ人、メキシコ性を「歴史的で個人的な孤独の生きた自覚」と定義づけている(*ibid.*: 89)。そして、その孤独と絶望から復帰することを欲した彼らは、メキシコ革命における農民反乱指導者であるエミリアーノ・サパタの主張にならい、メキシコの伝統の最も古く、かつ永続的なもの、あるいは根源への復帰と統合を目指すようになる。こうして、彼らはこのメキシコ革命を自分たちの「過去を取り戻し、それを同化して現在に活かそうとする運動」として性格づけたのである(*ibid.*: 152-156)。そこにはメキシコを先スペイン期から現代メキシコに至る歴史的連続体と考える歴史観が存在しており、かくしてメキシコ文化の根幹には古代の先住民文化が位置づけられることになるのである(落合 1996: 60)。

メキシコという国名は、かつてメソアメリカの広大な地域を支配したアステカの首都、メシコ・テノチティランに由来する。そして、現在メキシコの首都であるメキシコ・シティはこの町の上に築かれた都市である。当然のごとくメキシコの国家アイデンティティーの根幹には、このアステカが据えられて、落合一泰のいう「文化的自画像」が模索されたのである(落合 1996, 1999)。先に触れたように、この際アステカの持つ「花の戦い」による捕虜の獲得や人身御供といった好戦的で野蛮なイメージがことさらに

強調される⁷⁾。それはまさに〈男性性〉と呼べるものであった。そこにはアメリカに〈女性性〉をみようとしてきたヨーロッパのまなざしを、正反対の〈男性性〉を強調することで絶ち切ろうとしたメキシコ国家の思いが見て取れるのである。

これまでみてきたように、メキシコ革命によってメキシコ人は自らアイデンティティーを確立したのであるが、一方のマヤ地域においては「マヤ文化」を継承し、「マヤ語」を話す「マヤ民族」と呼ばれる先住民の人々にとっては、自己のアイデンティティーのよりどころは、時にユカテコ、キチェといった同じ言語集団となることはあっても、基本的には自分の住んでいるコミュニティにあり、「マヤ」はあくまで19世紀後半以降に、考古学や人類学の言説を裏付けとして、欧米のまなざしによって外側から作り上げられてきたものであったといえる。このように〈男性性〉をもって自ら「文化的自画像」を描こうとしたメキシコ中央に対し、植民地期以来の〈女性性〉を見出そうとするまなざしをもって西欧の側から描かれた肖像としてのマヤ。この2つの地域にある「遺跡」は、同じ国に属しながらも、それぞれ全く異なった「意味づけ」がなされて存在しているのである。

4 20世紀終盤のグローバリゼーション

4.1 「ムンド・マヤ計画」

20世紀終盤のグローバリゼーションの流れの中で、マヤ地域は新たな展開を迎える。1988年に「ムンド・マヤ計画」という総合観光開発計画が発足したのである⁸⁾。この計画の舞台となる「ムンド・マヤ」という地域は、メキシコのタバスコ州、チアパス州、カンペチェ州、ユカタン州、キンタナ・ロー州とグアテマラ、ベリーズ、ホンジュラス、エル・サルバドルから構成され、メキシコから見れば国家から独立した多国籍の地域統合であると考えられることもできる。世界観光機構（WTO）やヨーロッパ共同体（1993年からはヨーロッパ連合）、米国のナショナル・ジオグラフィック協会など様々な国際組織や民間企業により強力に支援されながら、参加域内の自然・文化遺産の保全と観光資源としての活用、そしてこれによる地域経済の活性化を目指したこの「ムンド・マヤ計画」によって、この地域は第3の植民地的状況の下におかれることになったと考えることができよう。

まずここで、この「ムンド・マヤ」という地域と、いわゆる「マヤ文明」が存在していたとされる地域とは微妙にずれがあるということを確認しておかねばならない。上述したように、マヤ地域では19世紀以来欧米の探検家や研究者によって遺跡が調査され、開発もされてきた。そういった中で我々はある「マヤ」イメージというものを持つに至ったのである。その「マヤ」イメージがもたれている地域をここでは「マヤ世界」と呼ぶことにしたい。この「マヤ世界」は強いて規定すればかつてマヤ語系の言語が話され

ていた地域という括り方ができるかもしれないが、明確な境界がないか、場合によっては実体としてそのようなものが存在しているのかどうかということすら議論の俎上に上り得るようなあいまいなものであったといえる。これに対して「ムンド・マヤ計画」の対象となっている地域、すなわち「ムンド・マヤ」は、先述のごとく、現在のメキシコ5州と中米4カ国という現在の行政区分によって明確に境界づけられていて、中には上記の「マヤ世界」には含まれない要素も含んでいる⁹⁾。この観光を通して世界に開いている「ムンド・マヤ」に身をおいたとき、マヤ遺跡は自ら変化することを求められることになったのである。

4.2 「ムンド・マヤ計画」以前のチチェン・イツァ遺跡公園の変化

チチェン・イツァ遺跡の場合、その変化は「ムンド・マヤ計画」以前から既に始まっていた。そのきっかけは1970年代中頃にエチェベリア政権下で開始されたカンクンの開発である。この国際リゾートのイメージを決定的にしたのが、1981年10月に23カ国の首脳を集めて開催されたいわゆるカンクンサミットであった。これによって国際的に知名度が上がったために、1980年代にはカンクンは堅調にその訪問者数をのばしているが、その増加は海外からの訪問者の増加にほぼ一致している。そして、このカンクンの発展に比例するかのようになり、観光資源としてのチチェン・イツァ遺跡の価値は高まっていったのである。

1983年にチチェン・イツァ遺跡公園の最初の大きな変化が起こった。それは、遺跡中心部分の真ん中を横切って、新チチェンと旧チチェンに分断していた国道180号線が、環境保護を理由として、遺跡北側を迂回することになったのである (Kelly 1993: 50)。この際、エル・カスティージョと大球戯場の側にあった遺跡の入り口は、大球戯場の西側に移動している。この道路の迂回の結果、遺跡観光目的以外で遺跡内を通過する車両がなくなっただけでなく、旧チチェンと新チチェンを空間的に分断していた道路がなくなったことで、遺跡がひとつになったといえることができる。

遺跡への入り口が移動したことで、もともと入り口付近で民芸品や清涼飲料水を買っていたピステなど遺跡周辺の町の人々が、売場の移転を迫られることになったが、このことは単純な問題では終わらなかった。この時期、チチェン・イツァ遺跡を訪れる観光客が増加してきたことに合わせ、カンクンの初期のホテル建設が一段落ついたこともあり、ピステなどからカンクンに働きにでていた人々が仕事を求めてチチェン・イツァにUターンしてきたのである。彼らは自らウィピル、そして石や木でできた置物やアクセサリーといった民芸品を作り、遺跡での観光客相手の商売に参入するようになる (Castañeda 1996: 74)。その結果、観光客にものを売る人々が300人から400人という規模で短時間に増加し、次第に遺跡入り口付近のみならず、遺跡内のセノーテ・サグラードに向かうサクベヤカラコル周辺などにも進入してくるようになったのである。そして、

この事態は遺跡内の美観を損ねる、木製品の材料伐採が環境を破壊する、セノーテ・サグラード付近のサクベで商売している人々の一部がサクベの縁を破壊するといったことにより、問題視されるようになり、1986年にはメキシコ国立人類学歴史学研究所 (INAH) による実態調査と問題解決への提言が行われている (Peraza López et. al. 1987)。

4.3 世界遺産チチェン・イツァ遺跡公園の変貌

「ムンド・マヤ計画」の発足とほぼ時を同じくして、1988年12月にチチェン・イツァ遺跡は世界遺産に登録されたが (UNESCO 1988)、それはこの遺跡のあり方にとって非常に重要な出来事であった。世界遺産登録に連動して遺跡公園としてのチチェン・イツァのあり方が大きく変化してゆくのである。ユネスコの規定している登録基準のうち 1) 人類の創造的天才の傑作を表現するもの、2) ある期間を通じて、または、ある文化圏において、建築、技術、記念碑的芸術、町並み計画、景観デザインの発展に関し、人類の価値の重要な交流を示すもの、3) 現存する、または、消滅した文化的伝統、または、少なくとも稀な証拠となるもの、という三要件を満たした登録であること (世界遺産研究センター 1999: 10)、そして「先スペイン期の都市チチェン・イツァ (Pre-Hispanic City of Chichen-Itza)」というその登録名を見ても、当然のことながら、この世界遺産に期待されているのは古代都市チチェン・イツァのイメージである。世界遺産に登録されるということは、観光地としては大変なイメージアップとなるが、そのためにこの遺跡公園の中では、求められる古代都市イメージにそぐわない要素の遺跡からの排除と建造物の持つイメージの純化がすすめられたのである。本研究ではこれを遺跡の「囲い込み」と呼ぶことにする。

この世界遺産登録をひかえた1987年にはそれまでの遺跡の入り口の南側のやや離れたところに遺跡公園管理事務所をはじめ、観光客休憩所、ミュージアムショップ、駐車場などからなるサービスユニットが完成し、遺跡の入り口もそこに移動していた。このサービスユニットにはティアングス (Tianguis) と呼ばれる民芸品市場も併設され、当初かなりの反発もあったものの、コーラなどの清涼飲料水を売ごく一部の人々を除いて、最終的に遺跡公園内で民芸品を売っていた人々はそこに集められてしまうことになる (Castañeda 1996: 232-258)。これによって遺跡公園内の美観を損ねていた要素のひとつが完全に遺跡内から排除されたのである。

さらに、一方で遺跡内では戦士の神殿、ジャガーの神殿、大球戯場、カラコル、尼僧院といった代表的な建造物で、建造物に登ること、あるいは建造物の一部に立ち入ることが禁止されるようになる。これは建造物の保護、そして転落事故防止という目的があつてのことであろうが、言いかえれば、19世紀以来マヤ遺跡に付随してきた探検イメージと結びつくスリルと危険性が極力排除されたということでもあり、かつ観光客自ら建造物に登って、有名なチャックモール像や様々なレリーフ、壁画などを近くで直接見る

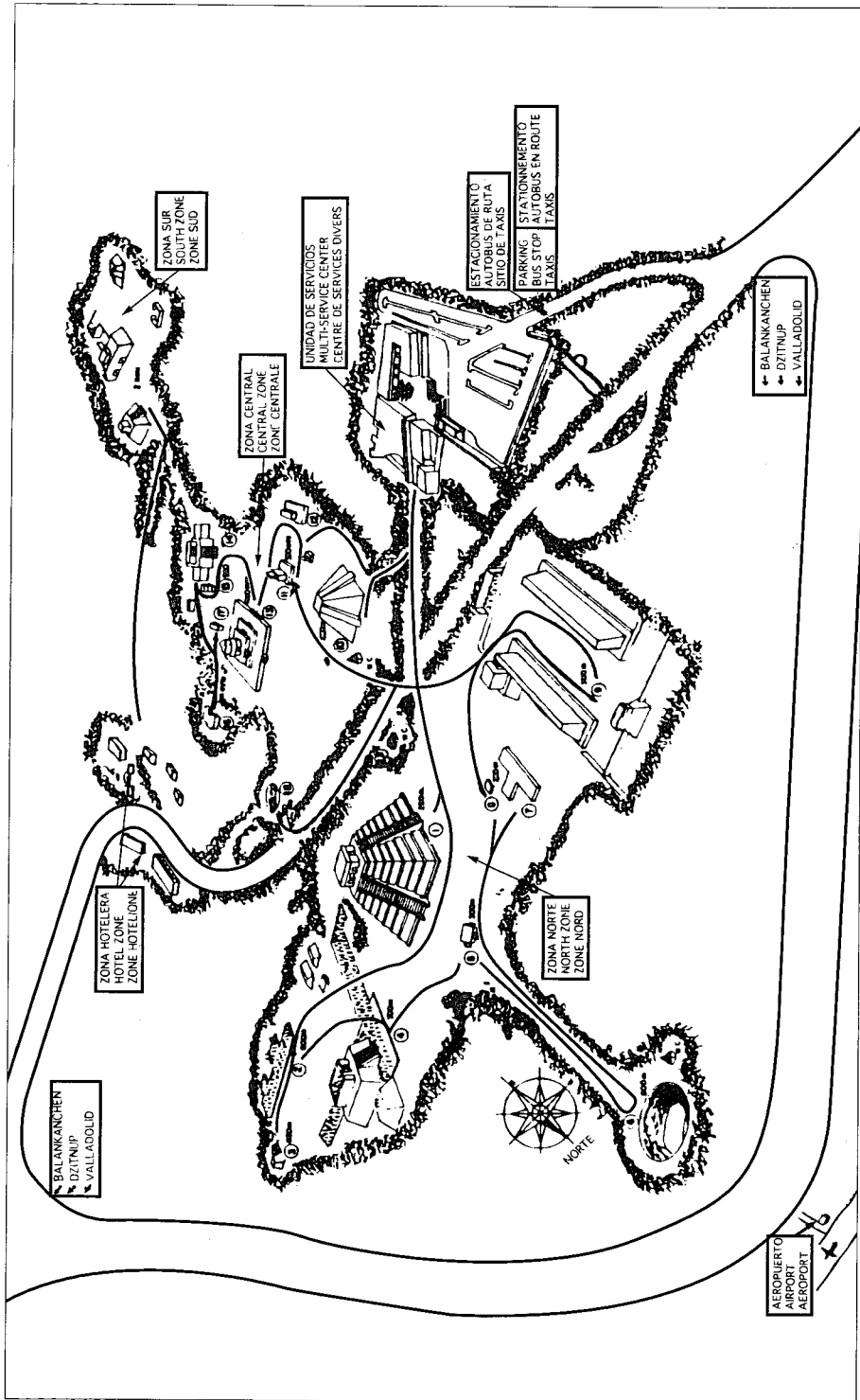


図4 1988年に作成されたチチェン・イツァ遺跡公園の俯瞰図 [Castañeda 1996: 160]

こともできなくなってしまったのである。その結果、現在でも上まで登ることができるエル・カステージョを除けば、その他の建造物は、これに群がる観光客の姿によって美観が損なわれるということなく眺められるようになったのであった。

1988年にユカタン州文化観光サービス協会（CULTUR）によって観光客向けに作成された遺跡公園の地図（図4）は、遺跡を北西方向から俯瞰したものだが、観光客が見学できる場所がまさに「囲い込ま」れた形で描かれているのは象徴的である。遺跡内を通過していた道路の迂回に始まり、民芸品を売る地元の人間、そして探検を疑似体験しようとする観光客すらも遺跡イメージから切り離し、排除することで、一種の無菌状態を作り出し、古代都市チチェン・イツァのイメージを「囲い込む」、それがこの時期に起こったチチェン・イツァ遺跡の変貌のあり方であった。

5 現在のチチェン・イツァ遺跡における考古学と観光のせめぎあい

5.1 新たな「マヤ文明」イメージの出現

1960年代以降、考古学方法論の発達やマヤ文字解読の進展などによって、マヤ考古学は急速に発展し、「マヤ文明」に関する新たな「事実」を次々に解明してきた。そこではかつて平和で、人々は星ばかり眺めていたかのようなイメージを持たれていたマヤ社会が、実は非常に複雑な構造を持ち、そこでは戦争や権力闘争を繰り返していたダイナミックで血なまぐさい歴史をもつことなどが明らかになり、それまで語られてきた「マヤ文明」とは全く違った文明像を我々に提示するに至ったのである。ジェレミー・サブローフはこれを「新モデル」と呼び、それ以前の「マヤ文明」像である「伝統的モデル」と明確に区別している（Sabloff 1990: 137-163）。なお、この「伝統的モデル」というのは、まさに19世紀半ばから20世紀前半にかけてスティーブンスやシャルネイ、モーズレー、マーラーといった探検家やモーレーやトンプソンをはじめとする多くの欧米の研究者によって築き上げられてきたものであり（ibid.: 21-65）、この「マヤ文明」像に植民地時代以来の〈女性性〉が内包されていたということは既に述べたとおりである。

「新モデル」形成の背景には様々な要因が考えられるが¹⁰⁾、特にマヤ文字解読が進み歴史的事実が少しずつ判明してくることにより、実在した王などの人物が登場する生き生きとしたストーリー性がそれぞれの古代都市に付与されることになったこと、そして支配者階級だけでなく、一般の下層階級の人々についても研究者の興味が広がって様々な観点から調査が行われることにより、古代マヤの一般庶民の生活ぶりが明らかになったことは、古代マヤ研究史上において非常に大きな展開であったといえるだろう。ただし、観光開発という脈絡の中で遺跡公園の整備が行われるときには、大抵の場合、見栄えのする巨大な石造建築物のあるその都市の中心部のみが「囲い込」まれる形になることが考えられ、どうしてもこの「新モデル」による説明のうち、支配者階級の人々にま

つわるストーリー性が優先的に活用されることになる。

実際、世界遺産にもなり遺跡公園として整備が進んでいるティカルやコパン、パレンケといった世界的にも有名なマヤ遺跡においては、文字資料の解読が進められた結果、都市毎に王朝史が復元されており、遺跡の「囲い込み」にこういった歴史性が利用されている。そこではある建造物が特定の王などと関連づけられて展示されているということも珍しいことではない。そして、遺跡公園に付属する博物館施設や観光ガイドによる解説、そして売店で販売されている古代マヤの解説書が、「新モデル」による説明に関して不足している部分を補うことになる。

しかし、チチェン・イツァ遺跡公園の場合、遺跡の「囲い込み」のあり方に他の遺跡に見られるような「新モデル」的な「マヤ文明」観はあまり感じられない。その理由はこの遺跡で発見された文字資料からは、支配者階級の人々にまつわるストーリーを構成することができていないということがまずあげられよう。また、それには新たにおこなわれた調査の成果が、なかなか十分かつ速やかに公表されないというメキシコ考古学界の事情なども全く無関係ではないかもしれない。「新モデル」によって書かれた最新のマヤの解説書は、欧米のアマチュア・マヤ研究者たちの知的好奇心を刺激しているのは確かなことであるし、実際チチェン・イツァ遺跡の売店でも当然のようにそういった書物が販売されている。またこの遺跡で働く観光ガイドもそんな知的好奇心を持ってやって来る観光客の期待に応えているはずである。だが、観光客を受け入れる側の、当の遺跡公園のあり方は、むしろ昔ながらの「伝統的モデル」的なイメージを強調しているように思われる。「古代マヤ文明」のイメージを一変させた「新モデル」も、チチェン・プロジェクト終了時点で既に定着してしまったこの遺跡の強力なイメージを覆すことはできなかったのである。

5.2 旧チチェンの切り捨て

上記のごとく、1980年代後半の「囲い込み」と筆者が呼ぶこの遺跡公園の整備の動きは、他のマヤ遺跡のあり方とは異なり、むしろ「伝統的モデル」的なイメージをはっきりと打ち出し、この「新モデル」のイメージをできるだけ小さく抑えようとするものと考えることができる。その象徴的な例が旧チチェン地区の南半分の切り



写真3 4つのリントルの神殿から見たチチェン・イツァ遺跡公園中心部はるか遠くに尼僧院とエル・カステージョが重なって見える。(筆者撮影)

捨てである。

旧チチェン地区の尼僧院の南側に広がる広大な区域での考古学調査は、1983年から翌年にかけて実施された第1期調査 (Lincoln 1987: 3-43) 以来、現在までメキシコ国立人類学歴史学研究所を中心に続けられており、この時期以降チチェン・イツァ遺跡における考古学者の関心はこの区域に向いていると見てよい。ここでは「新モデル」を前提とした調査が行われているからである。もちろん、一部の観光客の中にもマヤ文明に関する新しい知識を学習し、明確な考古学的関心を持ってこの区域を訪れようとする者も確かにいる。実際、旧チチェンの南部にある3つのリンテルの神殿や4つのリンテルの神殿といった建造物群は、アクセス可能ではある。だが、その為には、尼僧院の西側の小道を抜けて、かつてのサクベを2km近く歩かねばならず (写真3)、その上このルートの入り口も、ついうっかり見落としをしまいそうな小さな看板で示されているのみである。よって、メリダやカンクンからの日帰りツアー客がほとんどである中で、舗装されていないこの小道を延々時間をかけて歩いてまで建造物を見学しようとする一般の観光客はほとんどいないというのが現状なのである。そのような旧チチェンのあり方は、観光客に向けて開かれているチチェン・イツァ遺跡の「囲い」から、事実上この区域が切り捨てられているに等しいことを示している。

マヤランド・ツアーズというこの地域では老舗の旅行代理店のホームページの遺跡紹介のページ¹¹⁾を見ると、チチェン・イツァの説明の後、近くにあるバランカンチェ洞窟の紹介がなされ、その次に旧チチェンという項目が置かれている。これにウシュマル、カパー、サイール等の遺跡の紹介が続いてゆくのであるが、ここで旧チチェンがチチェン・イツァ遺跡と別個に単独の扱いをされていることは注目に値する。それは、まさに観光というコンテキストにおいてはチチェン・イツァ遺跡からこの区域が切り捨てられ、「囲い」の外に置かれてしまったことを象徴するものであるといえよう。

5.3 「ムンド・マヤ」のチチェン・イツァ遺跡公園

これまで見てきたように、チチェン・イツァ遺跡公園という場には、最新の考古学の成果をもとに「マヤ文明」を説明しようとする「新モデル」と、植民地時代以来の〈女性性〉を内包しつつ、「エキゾティシズム」で彩りを添えた「マヤ文明」観にもとづく「伝統的モデル」が並立しているといえる。その中で後者の方が強調されたのは、チチェン・イツァ遺跡が他の多くのマヤ遺跡と異なり、チチェン・プロジェクトの段階で既に固定していたこの遺跡のイメージがあまりに強烈で、なかなかぬぐい去ることができないということに加え、遺跡公園になっている部分においては、「新モデル」による説明が現実的にはこの遺跡の「意味づけ」にそれほど影響しなかったからであった。その結果、観光という文脈のなかで、「伝統的モデル」が積極的に利用されながら、「囲い込み」が行われることになったのである。だが、観光開発と関連づけて考えたとき、「ムンド・マ

ヤ」という場所においてチチェン・イツァ遺跡公園がどういう位置づけにあるのかというところがもう一つ大きな問題となるだろう。

人類学的な関心から形成されてきたともいえる「マヤ世界」から、観光を通して世界に開いている「ムンド・マヤ」へとチチェン・イツァ遺跡が置かれている場所が変わった現在、カンクンやメリダといった都市に滞在し、チチェン・イツァ遺跡公園に足を運ぶ観光客は、遺跡については相変わらずの一定のイメージを持ってやってくるものの、そのほとんどの場合、遺跡観光だけが滞在の目的ではない。「ムンド・マヤ」では遺跡もひとつの観光の目玉として、豊かな自然や生きた先住民の生活、植民地時代の建造物、そして海岸リゾート等の他の観光資源とともに同列に陳列されているに過ぎないのである。MUNDO MAYAという英語とスペイン語の二言語で書かれた同計画の宣伝雑誌だけでなく、テレビや映画などが描き出す映像情報、旅行会社の宣伝、そしてインターネット等により「ムンド・マヤ」地域には「マヤ世界」にはなかった様々なイメージが付与されてきた。そして、そこへやって来る観光客も様々な目的を持つようになってきたのである。よって、そのような「ムンド・マヤ」の現実のもとでは、国際的にその名前とイメージが知られ、売れる遺跡であるはずのチチェン・イツァ遺跡でさえ、そのような観光客をライバルとなるその他の様々な観光資源と奪い合わなければならない状況下に置かれてしまった。その中で、チチェン・イツァ遺跡は売れるために、あえて既に定着している「伝統的モデル」的イメージに対する需要を喚起する道を選択し、それが必然的にこの遺跡を「囲い込み」へと向かわせたのである。

このように、チチェン・イツァ遺跡公園における「マヤ文明」観の「新モデル」と「伝統的モデル」が並立する中での後者の優位とは、考古学と観光のせめぎあいの中での後者の優先的選択と言い換えることもできるのである。

6 まとめ

一定のイメージを遺跡に持って世界中からやってくる観光客によって観られる対象として、「マヤ文明」イメージの「伝統的モデル」を前面に押し出しつつ、そのイメージにそぐわないものは排除し、一方で印象深い要素をさらに強調しながら、ちょうど表面的に化粧を施す様な形で変貌を遂げ、観光客を「迎え入れる」。そんなチチェン・イツァ遺跡公園における「囲い込み」のあり方は、まさにグローバリゼーションの流れのもと新たに生み出されている植民地的状況において、この遺跡に〈女性性〉をみようとする外部からのまなざしに対する、遺跡公園側の「ポストコロニアル的」対応であるといってもよいのではないだろうか。

ただし、このような「囲い込み」のされ方は、既に述べたように、この遺跡が欧米に紹介され、本格的な調査と修復を完了し、観光化される時期が他と比べて早かったとい

うこと、そして国際的なリゾート地と地理的に近かったことなどいくつかの条件が重なって、初めて成立したものである。

ひとつの遺跡のあり方は、考古学の成果による「意味づけ」に、遺跡を取り巻く社会、すなわち国家、地域、そして周辺住民などの遺跡に対する思いが交錯し、ひとつの形を取るようになる。その上、最近のグローバリゼーションの流れの中では、観光を支える様々なインフラの整備が重要度を増し、その整備状況をはじめとしたいろいろな要素が絡み合うことによって、遺跡のあり方はさらに多様な形態をとりうるようになった。マヤ地域でもティカルやコパン、パレンケなど他に「囲い込み」の行われている遺跡公園には、最新の考古学調査の成果によって「意味づけ」直されながら整備されているものも多かった。また、いくら考古学上の大きな成果を上げていようと、交通手段や宿泊施設などが未整備のため遺跡公園として十分に整備されていないマヤ遺跡が無数にある一方で、エル・レイのように考古学上の意義はさほど大きくなくとも、カンクンのホテル地区の中にあるがために遺跡公園として整備され、常に観光客をよんでいる遺跡もある。そういった中で、このチチェン・イツァ遺跡の事例は、遺跡と観光の関わり合いについて考えてゆく上での、非常に示唆的な材料を我々に提示しているといえよう。

謝 辞

本稿は、共同研究会「自律的観光の総合的研究」における報告に加筆してまとめたものである。まずは国立民族学博物館の石森秀三先生には発表の機会を与えて下さったことにお礼を申し上げたい。この発表の際には、コメンテーターの江口信清先生、西山徳明先生をはじめとして参加された方々より様々な視点から貴重なコメントをいただいた。また、総合研究大学院大学における指導教官であった八杉佳穂先生にも草稿段階で本稿を読んでいただき、いろいろとご指導を賜った。さらに、天理大学の初谷謙次先生、山本匡史先生、及び立命館大学非常勤講師の井上幸孝氏をはじめ様々な方にいただいたご意見も非常に有意義なものであった。ここに感謝の意を表したい。なお、本研究は1997年から翌年にかけてメキシコ政府奨学金留学生としてメキシコ、ユカタン自治大学に留学する機会を得たことで初めて成立したものであることもあわせて明記しておきたい。

注

- 1) メキシコでは、こうした「遺跡」に対して、公的な場所では“ruinas”よりも“sitios arqueológicos (英語でarchaeological sites)”という言葉が選択されることが多いが、それは上記の「廃墟」と「遺跡」の意味の違いを意識したものとと思われる。
- 2) 一般にマヤ地域とは、現在のメキシコのチアパス州およびタバスコ州の東部から、カンペチェ州、ユカタン州、キンタナ・ロー州、そしてグアテマラ、ベリーズの全域、ホンジュラスおよびエル・サルバドルの西半分にかけての地域一帯を指すが、本研究のような「遺跡の意味づけ」に関する議論においては、ナショナリズム、リージョナリズム、エスニシティーなどが密接にかかわってくるため、この現代の行政区分が重要であるとはいうまでもない。

- 3) 1992年にはセビリアで「発見の時代」をテーマに万国博覧会が開催されたことをはじめとして、ヨーロッパではコロンブスの「発見」500周年の祝賀行事が各地で進められている。このようなコロンブスによる「発見」500周年祝賀ムードに対しアメリカ大陸の先住民が各地で組織する先住民諸団体は、こぞって「祝賀」反対運動を展開した。これを受けてヨーロッパ側でも「発見」の意味をあらためて問い直す動きが現れ、最終的にスペイン政府もセビリア万博の基本テーマ「発見の時代」に「2つの世界の出会い」というサブタイトルを添えざるを得なくなった（清水他 1992: 19-21）。この「2つの世界」という表現も、まさにヨーロッパ対アメリカの二項対立に基づいた見方をそのまま表現したものに他ならない。
- 4) ヨーロッパ男性とアメリカ女性との間で、時にレイプ同然の形をとりながらも生み出された両者の混血がメステイツであり、彼らは現在メキシコにおいては全人口の80%以上を占めるに至っている。
- 5) 落合はこの絵から「ヨーロッパ：アメリカ＝男性：女性＝立姿：横臥＝着衣：裸体＝キリスト教：食人＝科学技術：棍棒＝文明：野生＝文化：自然＝優位：劣位」という一連の二項対立を抽出している（落合 1993: 19）。
- 6) 他に中国、朝鮮、インドなどアジアから太平洋を横断してきた人々が「マヤ文明」を築いたとする説なども唱えられている（Wauchope 1962: 83-102）。また、現代における「マヤ文明」を宇宙人などと結びつける言説も、こういった議論の系譜に連なるものと考えてよからう。
- 7) アルフォンソ・カソは、アステカの人々は太陽の運行のための力を付与するため、人間の血を太陽神ウィツィロポチトリに捧げる必要があると考えており、その為に周辺の敵対国に「花の戦争」を仕掛けて捕虜を獲得し、これを生け贄に捧げたのだと論じ、アステカ人を「太陽の民 (El Pueblo del Sol)」と呼んでいる（Caso 1953: 23-25）。この「太陽の民」というイメージも現在ではアステカのイメージとして定着しているといつてよく、また「太陽」そのものも、そのエネルギーで情熱的なイメージから、現在のメキシコのイメージの中で大きな位置を占めている。
- 8) 「ムンド・マヤ計画」の母体は、メキシコ、グアテマラ、ベリーズの3カ国が、各国に点在するマヤ遺跡の観光資源としての有効活用を念頭に、1986年に開始した「ルータ・マヤ」と呼ばれる共同観光開発プロジェクトである。翌1987年にはホンジュラスとエル・サルバドルがこれに参加している。このプロジェクトはこの5カ国に加えて、これを支援する様々な国際機関や企業が参加して1988年に開催された第1回地域会議において、地域内の文化遺産、自然遺産も含んだ総合国際観光開発計画に発展することになる。これをもって実質的に「ムンド・マヤ計画」が発足したものとされるが、「ムンド・マヤ計画」という名称への変更が正式に承認されたのは1990年のことである。同計画の詳細については千代2001を参照のこと。
- 9) ムンド・マヤ計画の宣伝雑誌であるMUNDO MAYAにおいても、例えばタバスコ州に属する「オルメカ文明」や、ホンジュラス、グアテマラ、ベリーズのカリブ海沿岸に住む黒人系のガリフナなどが「ムンド・マヤ」の一員として紹介されている。
- 10) 「新モデル」成立の背景として、ピッツバーグ大学でサブプロフに師事した青山和夫は 1) より代表的なサンプルの収集, 2) 中流・下流階級のマヤ考古学者の増加, 3) 第2次世界大戦後の野外調査・研究の成果, 4) マヤ文字の解読の進展, 5) 新進化主義の影響, 6) セトルメント・パターンの研究, 7) プロセス考古学の影響, 8) 考古学方法論の発達, 9) ポストプロセス考古学の影響という9つの要因をあげている（青山 2001: 14-19）。
- 11) <http://www.mayaland.com/sites.html>

文 献

青山和夫

- 2001 「古代マヤ文明観の変遷とその現代的な位置づけ」『人文科学論集茨城大学人文学部紀要』35, 1-28。

荒木正純

- 1999 「〈異文化〉との出会い——〈表象〉としての〈文化〉」筑波大学文化批評研究会編『植民地主義とアジアの表象』pp.7-23, つくば市：筑波大学文化批評研究会。

ボーデ, C.・ピカソ, S.

- 1991 『マヤ文明失われた都市を求めて』落合一泰監修, 大阪：創元社。

Black, S. L.

- 1990 The Carnegie Uaxactun Project and the Development of Maya Archaeology. *Ancient Mesoamerica* 1 (2): 273-274.

Caso, A.

- 1953 *El Pueblo del Sol*. México D.F.: Fondo de Cultura Económica.

Castañeda, Q. E.

- 1996 *In the Museum of Maya Culture, Touring Chichen Itzá*. Minneapolis and London: University of Minnesota Press.

コロン, C.

- 1977 『コロンブス航海誌』林屋永吉訳, 東京：岩波文庫。

Duviols, J. P.

- 1985 *L'Amérique Espagnole Vue et Rêvée: Les Livres de Voyages de Christophe Colomb à Bougainville*. Paris: Éditions Promidis.

Edensor, T. and U. Kothari

- 1994 The Masculinisation of Stirling's Heritage. In V. Kinnaird and D. Hall (eds.) *Tourism: A Gender Analysis*, pp.164-187. Chichester: John Wiley and Sons.

初谷譲次

- 1989 「19世紀後半ユカタン半島におけるエネケン産業の発展(1853-1902年)——伝統的アシエンダからエネケン・プランテーションへの移行」『ラテンアメリカ研究年報』9, 15-40。

- 1995 「ユカタン・マヤの近代史——抵抗と受容の五〇〇年」小林致広編『メソアメリカ世界』pp.67-123, 京都：世界思想社。

- 1998 「中米ベリーズにおけるクレオール社会の形成」上谷博・石黒馨編『ラテンアメリカが語る近代——地域知の創造』pp.79-99, 京都：世界思想社。

ヒューム, P.

- 1995 『征服の修辞学, ヨーロッパとカリブ海先住民, 1492-1797年』岩尾龍太郎・正木恒夫・本橋哲也訳, 叢書・ユニベルシタス458, 東京：法政大学出版局。

Kelly, J.

- 1993 *An Archaeological Guide to Mexico's Yucatán Peninsula*. Norman: University of Oklahoma Press.

リード, E.

- 1993 『旅の思想史, ギルガメシュ叙事詩から世界観光旅行へ』伊藤誓訳, 叢書・ユニベルシタス420, 東京：法政大学出版局。

- Lincoln, C. E.
 1987 Proyecto Arqueológico Chichén Itzá, Resultados del Trabajo de Campo y Laboratorio.
 1983a 1985 con un Ensayo Exploratorio sobre el Patrón de Asentamiento del Sitio. *Boletín de la Escuela de Ciencias Antropológicas de la Universidad de Yucatán* 86.
- Loomba, A.
 1998 *Colonialism/Postcolonialism*. London and New York: Routledge.
- 増田義郎
 1965 「総説」『コロンブス、アメリゴ、ガマ、バルボア、マゼラン航海の記録』大航海時代叢書 I, pp.9-39, 東京：岩波書店。
- Matos-Moctezuma, E.
 2002 La arqueología y la Ilustración (1750-1810). *Arqueología Mexicana* IX (53): 18-25.
- モンテーニュ, M.de
 1967 「エセー」荒木昭太郎訳『モンテーニュ』世界の名著19, 東京：中央公論社。
- 落合一泰
 1993 「『アメリカ』の発見—ヨーロッパにおけるその視覚イメージをめぐって」『ラテンアメリカ研究年報』13, 1-40。
 1996 「文化間性差, 先住民文明, ディスタクシオン—近代メキシコにおける文化的自画像の生産と消費」『民族学研究』61(1), 54-56。
 1999 「政治的資源としてのインディオ文明—19-20世紀メキシコにおける文化的植民地主義と自己成型」, 田村克己編『文化の生産—20世紀における諸民族文化の伝統と変容 4』pp.138-164, 東京：ドメス出版。
- バス, O.
 1982 『孤独の迷宮—メキシコの文化と歴史』高山智博・熊谷明子訳, 叢書・ウニベルシタス, 東京：法政大学出版局。
- Peraza López, M. E., L. Rejón Patrón y J. Piña Loeza
 1987 La Invasión de Vendedores de Artesanías en la Zona Arqueológica de Chichén Itzá, Yucatán, *Boletín de la Escuela de Ciencias Antropológicas de la Universidad de Yucatán* 82: 17-30.
- Sabloff, J. A.
 1990 *The New Archaeology and the Ancient Maya*. New York: Scientific American Library, A division of HPHLP.
- 世界遺産研究センター編
 1999 『世界遺産事典—関連用語と情報源 改訂版』広島：シンクタンクせとうち総合研究機構。
- 千代勇一
 2001 「ムンド・マヤ計画とヘリテージ・ツーリズム」石森秀三・西山徳明編『ヘリテージ・ツーリズムの総合的研究』(国立民族学博物館調査報告21), pp. 231-242.
- 杓谷茂樹
 2001 「囲い込まれる遺跡—メキシコ,チチェン・イツァ遺跡のイメージ形成と遺跡公園の変貌に関する一考察」『ラテンアメリカ・カリブ研究』8, 1-13。
- Sharer, R. J.
 1994 *The Ancient Maya*. Fifth edition. Stanford, California: Stanford University Press.

清水透・富田虎男

1992 「序章」歴史学研究会編『南北アメリカの500年—2「他者」との遭遇』pp.3-34, 東京：青木書店。

Stephens, J. L.

1841 *Incidents of Travel in Central America, Chiapas, and Yucatan*. New York: Harper and Brothers.

1843 *Incidents of Travel in Yucatan*. London: John Murray.

United Nations Educational Scientific and Cultural Organization (ed.)

1988 *Report of the World Heritage Committee, Twelfth Session, Brasilia, Brazil, 5-9 December 1988, Paris: UNESCO.*

Wauchope, R.

1962 *Lost Tribes and Sunken Continents*. Chicago: University of Chicago Press.